

実のならないいちじくの木

ルカによる福音 13:6-9

そして、イエスは次のたとえを話された。「ある人がぶどう園にいちじくの木を植えておき、実を探しに来たが見つからなかった。そこで、園丁に言った。『もう三年もの間、このいちじくの木に実を探しに来ているのに、見つけたためしがない。だから切り倒せ。なぜ、土地をふさがせておくのか。』園丁は答えた。『御主人様、今年もこのままにしておいてください。木の周りを掘って、肥やしをやってみます。そうすれば、来年は実がなるかもしれません。もしそれでもだめなら、切り倒してください。』」

説教

主人は3年まっているのに実を結ばないのでもう切っ飛ばせと園丁に命じます。でも、園丁は肥やしをやるのであと一年まってくださいと頼みます。いちじくの木をめぐる主人と園丁のやりとりはこのようなものでした。たとえ話なので一年後の結末をルカ福音書は伝えていません。じっさいのところ、いちじくは実を結んでいるでしょうか。

むかし話にこうあります。

北風と太陽が、どちらが強いかで言い争っていました。議論ばかりしていても決まらないので、旅人の着物を脱がせた方が勝ちと決めようという力試しが始まりました。まず北風が思いきり強く「ビューッ！」と吹きつけました。旅人は震えあがって着物をしっかり押さえました。そこで北風は一段と力を入れてビュービューッ！と吹きつけました。すると旅人は「うーっ、寒い。これはたまらん。もう1枚着よう」と今まで着ていた着物の上にもう1枚重ねて着てしまいました。北風はがっかりして「次は君の番だ」と太陽に言いました。太陽はポカポカと暖かく照らしました。そして、旅人が1枚上着を脱ぐのを見ると今度はもっと暑い強い日差しを送りました。ジリジリと照りつ

ける暑さに旅人はたまらなくなつて着物を全部脱ぎ捨てると近くの川へ水浴びに行きました。

旅人のコートを脱がすのに強い北風は逆効果です。意地を張ってますますコートをつかんでしまいます。寒ければ着こみ暑ければ脱ぐのは道理です。はなしの結末は最初からわかっているようなものです。

では実をつけないいちじくの木ではどうでしょう。3年待っても実をつけないなら4年たったら実をむすぶ？園丁のとりなしもあまり効果はなかったのではないのでしょうか。おそいらく4年たってもいちじくの実はならなかったでしょう。

イエスのたとえ話の中では主人はきついことをいっています。でも主人の本心はいちじくの木が実を結ぶことを願っていたのではないのでしょうか。園丁も主人の気持ちを汲み取りあと一年、必死に世話をしたのではないのでしょうか。でも、いちじくは実らない。そうだとすると主人も園丁も苦しんだことになります。いちじくの木はどうだったでしょう。いくら頑張ったところで実を結ぶことがないわが身を苦しんでいるのではないのでしょうか。望み通りの結果がでないことはあります。たとえそこに神の愛、イエスの愛があったとしてもです。しかしそこには「愛の苦しみ」があります。十字架に架けられたイエスさまの苦しみがあります。

もしわたしたちが「愛の苦しみ」を知ることができ、少しでも「愛のために苦しむ」ことができれば、たとえ望み通りの結果がなくても、わたしたちの心は満たされるのではないのでしょうか。
